

# 「自然を改造する」思想と自然・人間の共生

熊本県相良村のダム建設反対派の意見を中心に

岩本真由子\* 楊凌煙 大川ヘナン  
佐々木美和 王一瓊

## 要旨

本稿の目的は、熊本県相良村、人吉市の球磨川流域におけるダム反対運動を事例とし、人と自然の共生、およびそれに関連する人と人との共生について検討することである。具体的には、本稿では、インタビューを通してダム建設反対派の住民の意見を聞いた。「自然を人間の思うように改造し自然の脅威をなくす」という現代工業の自然に対する理論の象徴であるダムは、反対派の流域住民の間で、どのような存在となっているのかを解明した。その結果、今回の聞き取りにおいては、いずれの反対派も経済的効果への言及があったり、社会的経済的しがらみを認識しており、反対派の内面には複雑な葛藤があることがわかった。ダム建設によって住民たちは、川とのつながりが弱くなることを強く懸念したり、ダム計画の再検討という住民側の要求に応じない行政に対して不信感を抱いたりしている。さらに、反対派住民は賛成派住民との関わりにおいて、意見の表出に配慮していることがわかった。ダムに対する、反対、賛成の表層だけではなく、その奥に複雑な葛藤があり、ダム、川、人間、さらに人間同士の関係性は多様かつ複雑であることが確認できた。

## キーワード

熊本豪雨 治水  
球磨川 ダム反対運動  
開発問題 自然と人間の共生

## 目次

- はじめに
- 先行研究の整理
  - 自然を改造する思想の誕生とその変化
  - 日本におけるダム事業の流れ
  - 球磨川流域における環境悪化の懸念
- 調査概要
  - 調査地の概要
  - 調査方法
- 調査結果
  - N氏(地域の旅館経営者):7月16日
  - S氏(地域の医院先代院長):7月17日
  - K氏(地域の製造業3代目):7月17日
  - T氏(川漁師)、Y氏(役場職員):7月17日
  - R氏(S氏の妻):7月18日
- 考察
  - かつての川との暮らしと、変化する川との関係性
  - 治水対策に対する住民の多様な希望
  - ダムによる治水および行政に対する住民の意見
  - 住民同士が及ぼす、自分の発言への影響
- おわりに

\*pinkakapoppo@yahoo.co.jp (岩本)

## 1. はじめに

筆者らは大阪大学「学修証明プログラム」人間科学研究科未来共生プログラム<sup>1</sup>において、2022年7月16日から18日まで熊本県の球磨川流域で行われた研修に参加した。テーマは「人と自然との共生」である。本稿は研修の一環として、参与観察の手法で調査を行い、まとめたものである。

現在、球磨川流域の治水対策として、日本最大の流水型ダムとなる「川辺川ダム」の建設が計画されている。だが、ダム建設に反対する住民の声は根強い。反対派住民は計画の場所にダムは不要であり、他の治水対策をとる主張の元、計画の再検討を訴えている。ダムは、川の氾濫を予防し、経済効果をもたらすことが可能だと一般には言われてきた。にもかかわらず、今まで水害に苦しんできたはずの流域の住民たちが、なぜダム建設に反対するのだろうか。ダムは住民たちにとってどのような存在であり、どのような影響を及ぼしているのか。

それを解明するために、本稿においては、熊本県相良村、人吉市の球磨川流域におけるダム反対運動を事例とする。本稿ではダムを現代工業の思想に基づく治水対策と位置づける。「自然を人間の思うように改造し自然の脅威をなくす」という現代工業の理論の象徴であるダムは、反対派の流域住民にとっては、どのような存在であるかを探る。また、ダムの建設をめぐる、自然環境や経済効果などといったマクロレベルの要素や、ダムに関する人間同士の関係性といったミクロレベルの要素を検討することによって、どのような葛藤が現れているのかを考察する。

以上の問いへの解答を通じて、ダムと川と人間の関係を再検討し、その中の多様性と複雑さを明らかにし、人と自然の共生、およびそれに関連する人と人との共生について検討することを本稿の目的としている。

## 2. 先行研究の整理

### 2.1 自然を改造する思想の誕生とその変化

現代工業の誕生である産業革命以降、化石燃料の燃焼による大気中の二

酸化炭素量の急激な上昇に伴い、地球温暖化などの問題が発生した。特に、グレート・アクセラレーション（大加速）と呼ばれる20世紀後半以降は、現代工業と科学技術を万能視する思想が主流になった結果、地球の生態系に大きな影響を与えた。それに対して、1987年に、「持続可能な開発（Sustainable Development）」の概念が国連によって初めて提唱されており（World Commission on Environment and Development 1987）、公の組織に広がってきた。

2000年代初頭に、悲観的な文明論とされていた「成長の限界」についても地質学や地球科学の研究において認められはじめ（中野 2017）、「持続可能性」の重要性が認識されはじめた。さらなるアンチテーゼとして、持続可能な発展は不可能だとされた。そこで、経済成長の限界が認識されており、経済成長を推進しない「脱成長」という理念が誕生した（ラトゥーシュ 2020）。このように、経済成長の信仰から切り替えられた、環境保全の思想、持続可能な発展の概念がその後の第四次産業革命にも影響を与えた。

「第四次産業革命」を代表する、現代工業のデジタル化と自動化を中心に据えるインダストリー 4.0の概念がドイツの国家プロジェクトによって2011年に提唱された。そこから、地球温暖化、土壌汚染など産業革命で生じた弊害を見直し、人間社会の発展と共に、自然を守るべきだという考え方が重視されるようになった。インダストリー 4.0の理念にかなうものとして取り上げられるのは、約2000年前に中国四川省に建設された都江堰施設、日本の信玄堤<sup>2</sup>のような古代から残されている治水施設などである。これらの治水施設は現代工業が出現する前に建設され、その川の特性に合わせて構造されたものである。このような古代からの、「自然と共生」の知恵は、今後持続可能な社会の構築にあたって、防災と水管理という側面から、大きな参考になると考えられている（和田 2005）。

## 2.2 日本におけるダム事業の流れ

20世紀に入り、世界諸国にも現代工業と科学技術の進歩が訪れ、「人間の力で自然を改造する」思想の影響の下、ダムのような人工構造物が大量に建設された。日本も例外ではなく、河川開発事業が全国に展開されることとなった。

ところが、村上(2015)によると、1990年代からアメリカにおいて、ダム撤去数が急増しており、2006年以降、アメリカ全土のダム撤去数は毎年50件以上を記録している。このような「脱ダム」の背景として、複数の理由が挙げられる。まず、多くのダムが老朽化したため倒壊の危険がある。また、水力発電の目的も兼ねてダムが構築されてきたが、遡河性の魚類の遡上が妨げられ、河川生態系が破壊され続けている事例が散見される。このような問題を解決するべく、ダムの撤去によって河川とその流域の環境を回復させようとする試みが世界的に広がっており、「脱ダム」の流れがみられる(村上2015)。「脱ダム」は、自然を改造するよりも自然との調和が重視されるため、これまでの産業革命の変化の延長線に置かれていると考えられる。

### 2.3 球磨川流域における環境悪化の懸念

本節では、球磨川に関する議論も触れておく。本稿の調査対象である球磨川流域には、1955年から2018年まで、荒瀬ダムが存在していた。建設当時行政側は住民に対し、メリットのみが強調されており、「川の洪水がなくなる」、「観光客が増加し、地域経済が活発になり、所得が増える」、「電気の使用料金が無料になる」などの説明があったという(若井2014)。ところが、運用後10年にも満たない1963年に、球磨川流域の様子が一変した。荒瀬ダムの上下流では洪水被害の頻発、放流時の振動被害、漁獲量の急減、水質悪化による悪臭やアオコ等の発生など、これまでにない水害や、経済的、社会的、環境的被害が起り、当時の宣伝と異なる様子が指摘され、ダム撤去に至った(若井2014)。

熊本県の蒲島郁夫知事は2008年当選時、当時の民意に応じて、球磨川流域に「ダムによらない治水」を看板政策として打ち出し、ダム計画を白紙撤回した。しかし、2020年の熊本豪雨後は、「流水型ダムの建設を求める」として、方針を転換した(浦2022)。

川辺川ダムの建設において、行政側はダム建設による防災の重要性を宣伝している。地球温暖化による影響で、防災・減災、水資源の確保、再生可能エネルギーである水力発電の重要性も増していると述べられている。これら

は、のちに撤去される荒瀬ダムの建設当時、行政が行っていた説明と同じである。それに対して、住民側から不満の声が上がっている(若井 2014)。

このようなダムの歴史的背景、球磨川の水害の背景を踏まえて、本稿では、球磨川流域の住民のインタビューを元に、ダム建設に対する意見の分析を行う。また、住民たちの被災経験や行政や賛成派への意見、ダムへの反対理由を並べ、ダムと川と人間、および人間同士の関係性を考察する。

### 3. 調査概要

#### 3.1 調査地の概要

本節では本稿の調査地となった、熊本県に位置する人吉市および相良村の概要について触れておきたい。

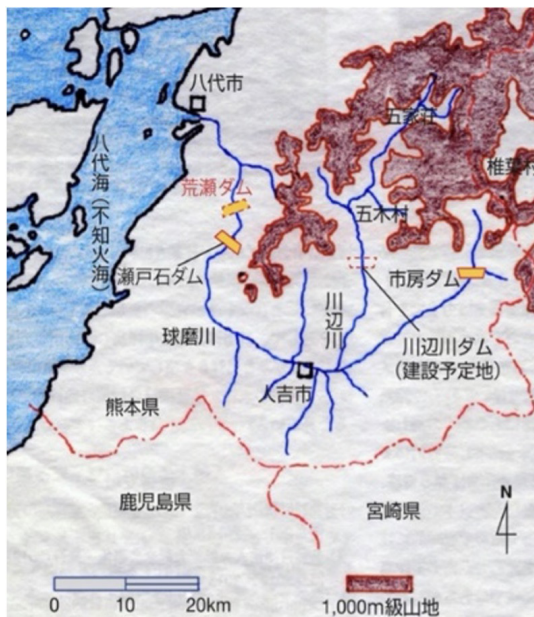


図1 球磨川流域と主要ダムの位置(若井 2014)

相良村および人吉市は球磨川流域内に属し、熊本県の南部に位置する隣接した市町村である。相良村の西南に人吉市が位置し、人吉市は熊本県の最南部に位置づけられる。両市町村とも広大な森林に囲まれながら、後述するように川資源にも恵まれている。人吉市では球磨川の観光資源を活用して、「球磨川くんだり」、ラフティングが有名である。相良村は林野面積(73.3%)および販売農家率(64.2%)が全国平均よりも10%以上も高いことが記録されている(農林水産省熊本県相良村 2022)。相良村では、米、茶、タバコ、メロンといった豊富な農作物が生産されている。両地域の人口は決して多くない。2020年のデータを元に公表された調査によれば、人吉市住民基本台帳人口は3.1万人、相良村の住民基本台帳人口は4200人であり、高齢化率はいずれも37%を記録する(総務省統計局統計情報利用推進課 2022)。両市町村で、高齢化は一つの行政上の課題となっており、行政運営だけではなく、防災の観点からも高



写真1 2020年熊本豪雨水害における氾濫時のピーク水位が示された電柱。人の背丈を優に超える。

(2022年7月16日午後2時、筆者(楊凌煙)撮影)



齢化の対応が求められていることは想像に難くない。

人吉市および相良村は、両市町村とも川と深い関わりをもっており、本稿で度々登場する球磨川は人吉市を東西に横断し、球磨川水系最大の支流である川辺川は相良村を南北に縦断する。図1に示したように、二つの水流は相良村南に隣接する人吉市で合流する形となっている。このように、相良村および人吉市は古くから川と隣接し密接した暮らしを営んでいるが、多くの水害を経験してきた。その証拠に人吉市には様々な所で浸水の高さを示す表記を見つけることができる(写真1)。

本稿では気象庁により「令和2年7月豪雨」と名づけられた2020年7月の災害(以下、熊本豪雨)を取り上げる(気象庁2020)。熊本豪雨は2020年7月3日から4日までの48時間で記録的な雨量が記録され、その影響で球磨川が氾濫を起こしたとされる(防災科学技術研究所調査速報2020)。熊本豪雨における被害は甚大であり、熊本県内だけでも死傷者数は111名に及び、そのうち約5分の1に相当する20名が人吉市内の死者数にあたる(内閣府2021)。

### 3.2 調査方法

本研究では、筆者らは人吉市および相良村で参与観察調査および、半構造化インタビューを行った。調査期間は2022年7月16日から2022年7月18日の3日間である。調査期間中に、筆者らは、人吉市の被災後の街や相良村の水田や田んぼを観察してから、実際に水田に入って藻取りを行った。観察の結果に基づき、筆者らは、人吉市や相良村の住民合わせて6人に対して、インタビュー調査を実施した。調査対象者の6人の許可を得て、ICレコーダーを2台設置し、インタビュー調査の内容を記録した。調査概要は表1の通りである。

次に、調査対象者である住民の基本情報を提示する。本調査では、調査対象者の背景は多様だった。調査対象者の基本情報は表2にまとめる。

表2に示したように、調査対象者の職業が多岐に渡り、医者、経営者、川漁師、役場職員などである。また、調査対象者の年齢層も異なり、80代といった高齢の方もいれば、30代の方もいる。

表1 調査概要

日程	場所	内容
2022/7/16	人吉市 ホテル	宿泊ホテルの経営者 N 氏にインタビュー。
2022/7/17	相良村 地域の医院	医院にて、先代院長 S 氏にインタビュー。
	人吉市 地域の製造所	製造所にて、施設見学及び経営者 K 氏に インタビュー。
	人吉市	川漁師 T 氏及び役場職員 Y 氏と晩食を食べな がら、インタビュー。
2022/7/18	相良村 水田 田んぼ	田んぼ周辺の方々へ挨拶に回る。
		無農薬農法を行っている水田にて、藻取り作 業を行う。地域医院の先代院長の妻である R 氏にインタビュー。

表2 調査対象者の基本情報

番号	仮名	基本情報
1	S 氏	地域の O 医院先代院長。地域医療の他、水俣病治療も手掛ける。
2	R 氏	S 氏の妻。S 氏と共に、グループホームなどの立ち上げなどを行う。
3	K 氏	地域の製造業 3 代目。被害多し。哲学科卒。
4	N 氏	地域の旅館経営者。被害多し。武道をたしなむ。
5	Y 氏	役場職員。相良村で生まれ育った。愛犬がいる。
6	T 氏	鮎漁で生計を立てる川漁師。生協職員だったが、川に魅せられ転職。

## 4. 調査結果

本節では7月16日から7月18日までのインタビュー内容および参与観察の結果を、フィールドノートおよびインタビュー時の音声記録よりまとめて時系列順に並べる。

### 4.1 N 氏(地域の旅館経営者): 7月16日

初日である7月16日に、人吉市で宿泊業を営む N 氏に話を伺った。旅館は



昭和44年創業で、建物自体は少し年季を感じるが、内装は床や壁、家具に至るまで真新しい。宿泊施設の食堂に皆で座ると、N氏はパソコンで熊本豪雨の際の映像記録を見せてくださった。5分程度で水が側溝から一気にあふれ、水位をあげていく様子が確認できた。旅館中が泥で埋まり、ボランティアと共に何十日かけて片付けを行った。壁紙や家具はすべて泥にまみれ、張り替え、取り換える事となった。N氏は、大きな人的、物的被害を経ても、移転の可能性は口にはされなかった。

#### 4.2 S氏(地域の医院先代院長):7月17日

翌日の7月17日の午前中は、相良村O医院にて、先代院長であるS氏から話を伺った。O医院の通り沿いには住宅に加えて、薬局や肥料店といった店がいくつかあり、通りを外れると、田んぼやタバコ畑が広がる。

かつては入院病床もあったというO医院は広く、従業員用の一室も広々としていた。そこで座り、話を伺った。途中、S氏の妻であるR氏からおにぎりとお茶、お饅頭などの差し入れを頂いた。相良村の歴史とS氏の子ども時代の話話を語ってもらった。S氏は家の近くの用水路について「今より幅が広くてきれいな水が流れててね。そこで物を洗ったり、飲み水にしたりです。しじみなんか結構たくさん採れてね、味噌汁に入れて食べてた。おいしかったですよ」という。

川でウナギを採ったり遊んだりした話ののち、社会の発展とその弊害についての話の流れ、学生の頃、水俣病に関わりたかったが、跡を継ぐために帰ってこい、ということで帰ってきたとの話を伺った。帰郷後も、人吉球磨自然保護協会の会長として、山の木の皆伐に対して、反対の署名を集めたり、ゴルフ場建設反対運動などに携わったりしていた。その後携わった球磨川鉄道保存運動から、川に架かる鉄道の第四橋梁の話題になり、水害へと話が移っていった。

球磨川流域の地図を広げて、あの日被災者が亡くなった順番を、一つ一つ示しながら、川の流れについて説明して下さった。被災した人々への聞き取りなどから、川から水があふれた順を検証していったデータを示して、「国交省は球磨川本流からのバックウォーター（逆流）であふれたというけれども、

支流の細くなっているここからもう溢れていたんではないかと考えています」と語った。ダム反対派で検証データを行政に提出したが、「データを持って行っても、ダム建設ありきで、向こう（行政）に対話する気がないですから」とS氏が述べた。「ダムの予定地の（川辺川）上流では、雨量が少なかった。だから（国交省にダムの是非について）一緒に検証をしよう、見に行きましょうと言っただけけれども、そんなことはしない訳ですよ。自分たちが間違っているって、分かっているんだと思いますよ」という。

「どのような治水対策を望むか」と筆者らは伺うと、「私たちとしては武田信玄のつくった霞堤、堤防をわざと細かく切って、逆の流れを起こすことで洪水をやわらげるといことですね。そういうのがいいんじゃないかと考えています」とS氏が答えた。続いて、S氏は以下のように語り続ける。「地域の人の繋がりも大切だと思いますね。高齢者の中には、耳が遠くて防災無線が聞こえない人や、極端に言えばここでずっと生きてきたのだから、水害で死ぬなら死んでもいいとおっしゃる方もいます。けれど、助け合っというか、地域に声を掛ける人がいるとだいぶ違うと思いますね」と述べ、人間同士の助け合いの重要性を強調した。また、S氏は田んぼダムの可能性も言及した。「（地域の主要農産物である）タバコをつくるために、あるいは他の作物を育てるために、田んぼの水が要らない時期もあるわけで、排水溝の工事をやって水を早く流すようにした訳です。昔は例えば田んぼの中に魚が泳いでいて、それを捕まえたりしていたんですけども、今の子どもたちは（魚がいなくなったので）そういうことが出来なくなったんです」という。また、田んぼだけではなく、S氏は森林の治水効果も語りながら、昔からの川辺に生活している人々の知恵を紹介した。「昔は山に降った水がもっとゆっくり出てきてたんで、水害の常襲地帯の人たちも、ああ、あの辺まで水が来たね、じゃあそろそろ畳をあげようか、逃げた方がいいねっていうのが分かってたんですよ」という。だが、「今は山が荒れたからなのか、地球温暖化なのか、雨の降り方も変わってきましたが」と気候変動による影響も触れた。

そして、S氏は、被災して死にそうになった人々の話を引用し、川との共生について述べた。「洪水を起こすのがこの川の自然な姿じゃないんですか。私たちは何度洪水があっても、川と一緒に生きていきたい。だからダ

ムをつくることは問題の解決にならないと思いますよ」と語っていたという。「(流域住民が)なぜそう言うのかを行政は考えていく必要があると思いますね」とS氏がまとめた。

### 4.3 K氏(地域の製造業3代目):7月17日

午後は、人吉市にて製造業を営むK氏に話を伺った。製造所のある通りは、かつての城下町の一角である。はじめにK氏に製造現場を一通り案内していただいた。冗談を交えながら、よどみなく説明してくださった。店内の隅には、親戚の共産党系編集者が作成したという、反対派の間で読まれている書籍『球磨川豪雨災害はなぜ起こったのか ダムにこだわる国・県の無作為が住民の命を奪った』がひっそりと置かれている。水害のことについて伺うと、製造所の外へ出て、「ここまで水が来ました」と示してくださった。「(経営する製造所のある)この町は浸からないから、水害の時(付近の被災地に)手伝いに行っていた」と製造所のある小高い通りから、一段下の街並みを見渡して示し、「今回(の水害で)初めてこっちがお世話になった」と述べられた。

そして、K氏は当初の状況を語った。「この辺は球磨川の水を強制的に吐き出すポンプ場があるので今まで浸からなかったんですけど、その能力を超えた水が降った。ダムが満杯で一気に放水したから浸かったという説もあるんですけど、その場合はそのダムの側がほんとのこと言わないんで。ただ、ダムがあろうとなかろうと、ものすごい雨量だったので、このたびの災害は避けられなかったんじゃないかなということを思いますけどね」という。

水害での製造所設備の損傷規模について尋ねると、祖父からの経営方針で、これまでは銀行から融資を受けずに経営してきたけれども、水害で融資を受けざるを得なかった話などを伺った。その後、ダムについての考えを聞くと、一つ一つ言葉を選ぶように語ってくださった。「僕、気持ち的には(ダム)反対なんですけど。じゃあ反対だって旗を振るわけにはいかないですね。やっぱり商売をしてるといろんな反対の人も賛成の人もお客さんなんで、政治的なことは言わないことが一番賢いですね。それが正しいか正しくないかわかりませんが、僕は経営者社長なんで、従業員の生活が一番。それ考えてやっぱり仕事してますね」という。続いて、K氏はダム問題についてあまり言いた

くないとして、理由を以下のように述べた。

「反対だけど、(賛成派に)議論で勝っても、じゃあダムを作りませんとはならないでしょ。自民党の人はダム作りたいみたいですけど、そう言うわけんかになって、結論が出ない。そういう話ははじめからしないほうがいいですね。ダムはやっぱり難しいですよね…」という。

その後雑談をし、製造所の前で別れた。

#### 4.4 T氏(川漁師)、Y氏(役場職員):7月17日

夜は川漁師であるT氏と役場職員のY氏と、地元のイタリア料理店で食事をしながら、話をした。それぞれがピザやパスタなどを頼む。Y氏は、相良村で生まれ育ち、「川で泳いでいました」と自身の経験を語ってくれた。川漁師であるT氏は、漁師の仕事の方法について語りながら、下流の鮎は大きくても水質への懸念から、料理店から不人気で、できるだけ川辺川上流の鮎が欲しいといった話や、ダムが出来て水質が悪化したら漁師としては死活問題である、等の話を伺った。望む治水対策について尋ねると、高台移転を挙げてくださった。実際にT氏は熊本市からの移住後、はじめは川のそばに住んでいたが、その後高台への引っ越しを行っている。「ここに住んじゃダメだと思ってから引っ越ししましたもん。正解でした。そこに住んでたら、被災してました。だから、やっぱり危ないところに住んでる人は、できるなら、移転にすべきだと思います。それが理想だと思います」とはっきりと語ってくださった。

会話をしながらゆっくりと過ごし、食事を終えて別れた。

#### 4.5 R氏(S氏の妻):7月18日

3日目は田んぼで草抜きの作業を行った。田んぼ作業に入る前に、S氏の妻であるR氏にも話を聞いた。O医院の裏手にS氏とR氏の家があり、R氏は家の前で幼い孫のN君と遊んでいた。声をかけ、その場で話を聞いた。その間、N君はあたりを楽しそうに走り回っていた。この辺りの昔の風景について伺うと、「側溝が素掘りだったころは、蛍がぼおーっと、飛んでいて。採りに行くものじゃなくて家に入って来てた。源氏物語の世界。タニシも沢蟹もいて、

晩御飯のおかず」「O医院がこっちに移ってきた昭和52年くらいに、コンクリートに(なって)」現在の側溝については、「今は蛸はもちろんいないし、タニシも沢蟹も孫に見せようと思ったけどいない。コンクリートだとかにかく草が生えないし。藻とか、食べるものが育たないところには何も育たない。でもだからって、昔に戻したらどうなるのかなと思う」とR氏が語り、昔と今を比較しながら、村の風景を紹介した。

「そのまま(素掘り)にしてあるところには蛸がいるけど、農薬をかけるから、草が弱って、それを食べる蛸も減ってきてはいる」と述べながら、R氏の話は、農薬など、現代の生活の話から、過去の生活へと移っていった。今の高齢者は、かつて、人と自然の線引きができないような、自然と一体化した暮らしをしていた。彼ら彼女らは、言葉にできない経験的な知恵でもって、自然とのさまざまな衝突を乗り越えていたという。一方で、その人々と、言語化の出来る反対運動をする人々とは落差があるという。「(高齢の方に)取材に行ったりしても、あんたたちはわからんばいって。冷ややかで。なんで通じないんだろうって悩んで」

続いて、川辺川上流の村である、五木村の反対運動についても述べられた。R氏がグループホームで話を聞いた五木村の人々は、文字が書けない、読めない人々も多かったという。彼ら彼女らはR氏が直前に述べた、言葉にできない知恵で生活していた人々に当たると考えられる。五木村は当初、村を挙げてダムに反対していた。しかし、災害がなくなることを期待した下流域のダム賛成派から、「水害がなくなる」「(反対することで)迷惑をかけちゃいかんでしょう」との反発があり、自分たちが辛抱すればいいとの思いから、と反対することをやめた。その直後、今度は下流域から(脱ダムの流れを受けてか)反対運動が発生したと述べた。

続いて、同じくダムと人の間で苦しんだ人として、O医院の先々代院長であり村長であったS氏の父親の存在が語られた。「(相良村は)主人が昭和46年ぐらいに帰ってきたときも、家でわらの中で寝ている、それくらい貧しい村だったの。だから産業を起こさないとお茶、タバコ。日本の農業の構造として大規模にしないと収益があがらない。(義父はダムについて)すごく苦しんでた。本当は(ダムに)反対。だけど村民の生活も良くしないといけないと

いうのも、すごくあって。(村は) 道も広くなって便利になったけど、失ったものも多い。日本全国そう。じゃあどこでストップすればよかったのかなって思う。どの時点だったのかなって」

筆者らは前日に人吉市の被災者の方に話を聞いたとお伝えすると、R氏は毅然とした口調で、「被災者のかたは、(行政に)本音で語れない事があるのではないかと思います。行政不信というのはすごい。意見を取り入れるためではなく、ただ意見を聞くだけです。前の潮谷知事<sup>3</sup>は、住民集会を何回も開いていて、国交省も賛成も反対も並ぶ場があった。今の蒲島知事は話を聞かれないですね」と語る。

最後に、R氏は賛成派への配慮について述べられた。「保育園の寄り合いでも、旦那さんが土建業で働いているひとは多い。施設<sup>4</sup>でも職員の中にも(賛成の人が)いるから、決して(反対だとは)言わなかった。そのひとたちはそれで精一杯暮らしている。だから、せめて女性の人たちをちゃんと雇用して、(土建業の夫と)と同じお給料で働ける場を作れたらと思って」という。

その後、聞き取りした場所の隣にある田んぼで、熊本にて無農薬有機の田んぼ復興をしているボランティアの指導のもと、草取りなどの作業を行った。R氏もしばし見守ってくださった。

## 5. 考察

調査を通して、ダム建設に反対する地元住民の、川辺川に対する愛着の深さが強く感じられた。一方で経済的社会的な要因は無視できず、賛成派への気遣いなどの葛藤もみられることから、ダム問題の難しさがうかがえる。本節では、ダム、川、人間、さらに人間同士の関係を論じながら、以下の4つの側面から考察を行う。

### 5.1 かつての川との暮らしと、変化する川との関係性

今回、医師とその妻、製造所社長、川漁師、役場職員、様々な当事者に話を伺った。その中で、頻繁にかつての川、川と共にあった暮らしについて語られた。例えば、S氏からは農業用水路で物を洗ったり、しじみをとっ

て味噌汁に入れたりしていたとの話を伺った。川や農業用水路が、生活に欠かせないものだったことが推察される。さらに、生活に利用するだけが、川と暮らすことではない。川と過ごす余暇について語る住民も多い。また、役場職員である Y 氏は、「小さい頃は川で泳いでいました」と思い出を語る。S 氏の妻 R 氏も、「蜚が飛んでいて、源氏物語の世界」と語る。「川と暮らすこと」には、情動的なつながりも含まれていることが伺える。

しかし現在の側溝について、R 氏は「今は蜚はもちろんいないし、タニシも沢蟹も孫に見せようと思ったけどいない。」S 氏は、「田んぼの中の魚を捕まえたりというのは、今の子どもたちは（魚がいなくなったので）出来なくなったんです。」一番身近な「川」であった側溝と人々の暮らしが切り離され、次世代への伝達が難しくなっている様子がうかがえる。R 氏は、「(村は) 道も広くなって便利になったけど、失ったものも多い。日本全国そう。じゃあどこでストップすればよかったのかなって思う。どの時点だったのかなって」という。

一連の語りから浮かんでくるのは、否応なしに川との「関係性の貧困」が進行している様子である。「関係性の貧困」とは、本来、人と人との関係性である「社会関係資本」の減少を示す用語で、アメリカや日本などの先進国で深刻とされており、格差の拡大が原因の 1 つとされ、相互扶助の減少などによる社会不安の広がりが問題となる（中野 2020）。一般には川に対して使う用語ではないが、人々が川との情動的なつながりを求めていることから、本事例は人と川との社会関係資本の減少と言えるであろう。社会哲学者である中野佳裕は、社会の転換にあたって、関係性の貧困と並び、「生態学的な臨界点」すなわち気候変動や生態系の多様性減少などが障壁となっていると述べる（2020）。

川との関わりの変化について、住民たちの語りからうかがえるのは、川とのつながりを次世代に繋いでいけないことに対する喪失感や諦観を伴う不安である。ここでは、川の「生態学的な臨界点」への懸念だけではなく、川との社会関係資本すなわち「川とのつながり」が失われることが問題となっていることが推測される。統計情報としても、地域の人々の「自然親和度」が「地域の幸福度」を有意に規定するとの結果もある（白井・田崎・



田中 2013)。

日常生活だけではなく、水害の最中においても、かつては川との関係性が構築されていた。S氏からは、「昔は山に降った水がもっとゆっくり出てきてたんで、水害の常襲地帯の人たちも、ああ、あの辺まで水が来たね、じゃあそろそろ畳をあげようか、逃げた方がいいねっていうのが分かってたんですよ。今は山が荒れたからなのか、地球温暖化なのか、雨の降り方も変わってきましたが」との話があり、K氏は、「(経営する製造所のある)通りは浸からないから、今回初めてこっちがお世話になった」と述べられた。球磨川流域において、水害の様子が変化している事が推測できる。環境学者である阿部健一は以下のように述べる。

雨の降り方は確実に変わってきている。このことは研究者が実証するよりも先に、直接影響を受ける人々が実感としてしているところである。農業の現場では、雨が極端に局所的に集中して降るようになっているため、従来のシステムによる気象予報では不十分になっているという声を聞く(阿部 2022)。

世界的にも、これまで水と川と生きる中で培われてきたつながりが崩れるほどの災害が起こっており、川との関係性の再構築は普遍的な課題であることがうかがわれる。

## 5.2 治水対策に対する住民の多様な希望

激甚化する災害に対する流域住民の選択は、川との関係性の結び直しであると考えられる。T氏はできるなら高台移転が理想であると述べ、自身も引っ越しを行っている。一方で、旅館経営者のN氏は、人的物的被害が大きくても、移転の可能性は口にされない。旅館は銭湯として地域住民にも多く利用されており、地域のために移転はできないといった背景などが推察される。同銭湯は地域に根ざした経営を続けてきた銭湯であり、N氏は今後もそのように経営を継続していきたい思いがある。

S氏は霞堤、田んぼダム、森林管理(緑のダム)など多数の事例を挙げ、

複合的な対策の重要性を訴えた。S氏からの聞き取りによると、「被災して死にそうになった人」も、「私たちは何度洪水があっても、川と一緒に生きていきたい」と語っていたという。この言葉より前は、S氏はデータの引用や、自身の活動の経緯などから意見を述べられており、他者の気持ちを引用することはなかった。したがって、この被災者の言葉は、S氏自身の思いと共鳴するところがあると推測される。「(流域住民が)なぜそう言うのかを行政は考えていく必要があると思いますね。」川の流れを利用したり、人とのつながりを利用したり、「流れをねじ伏せる」ダムではない多様な治水対策が、反対派住民たちの希望として挙がってくる。

### 5.3 ダムによる治水および行政に対する住民の意見

当事者である流域住民は、行政に対する強い不信感を口にする。S氏は、「(国交省にダムの是非について)一緒に検証をしよう、見に行きましょう」と言ったんだけど、そんなことはしない訳ですよ。自分たちが間違っているって、わかっているんだと思いますよ」と言う。T氏は、実際にダムの建設予定地へ足を運び、ダムの治水の有効性について「嘘ですよ」と語る。そして、ダムが無かったから豪雨災害が起きたと考える賛成派の存在に触れ、国のプロパガンダの影響について言及した。T氏は賛成派の国と反対派の住民と一緒に科学的な検証を行わないことには、真実は明らかにならないと述べ、このままでは災害が繰り返される事になりかねないと、強い危機感をつのらせている。K氏は、「ダムが満杯で一気に放水したから浸かったという説もあるんですけど、その場合はそのダムの側がほんとのこと言わないんで」と述べる。終始落ち着いた語り口である彼らが、行政の対応について語る時には、語気が強くなる。彼ら彼女らは、対話は閉ざされ、本当のことは伝えられないと感じており、強い不信感と怒りをもつ様子がかがえる。住民たちが不信感と怒りを覚える理由の一つに、白紙撤回の撤回という、政策指針の変更が考えられる。撤去された荒瀬ダムなどの事例が十分に検討されず、白紙撤回時の問題や、水質や生態系に対する影響などが検討の俎上にのせられないまま、S氏が語るような、「ダムありき」の治水計画が復活したと感じられることが、住民達の怒りの原

因の一つである。

現在ダム計画を立てているのは、公共事業が大規模化する時代に生まれた、川とのつながりのない膨大な数の当事者である。本論の 5.1 および 5.2 に述べたような、川とのつながりを感じ、つながりを保つ治水対策を重んじる流域住民は、計画に参加していない。他の河川においては、地域住民も交えて河川計画を考える、流域委員会が設置される事例があるが、川辺川においては設置されていない（「7.4 球磨川豪雨災害はなぜ起こったのか」編集委員会 2021）。川との情動的なつながりを保つ治水対策を行うためには、それを理解している流域住民が、治水計画に参加する必要があると考えられる。

#### 5.4 住民同士が及ぼす、自分の発言への影響

今回お話を伺った住民たちは、治水のためのダムには、反対の立場である。しかし、ダムの経済効果に対しては葛藤がみられ、さらに、賛成派への配慮が、反対派住民自身の行動や発言に影響している。したがって、反対派も時に、経済効果へ配慮したり、沈黙したりする場面もある。

例えば、R 氏は村長であった義父（S 氏の父）の意思決定について、以下のように語る。「（義父はダムについて）すごく苦しんだ。本当は（ダムに）反対。だけど村民の生活も良くしないといけないというのも、すごくあって」という。治水のためのものとしては反対でも、他に産業もなく、地域のためを考えると、村長として反対と断じる事は難しい。そのような葛藤がこの語りからは表れている。T 氏は、自治体関係者であれば交付金や補助金の停止、事業者であれば事業発注の停止など、反対派に対する圧力や嫌がらせが発生している事により、賛成に追い込まれる人々の存在について指摘する。産業を産むものとしてのダムは、ダム反対派を悩ませ葛藤させるほどの社会的経済的な力をもつ存在であることがわかる。

ダム反対派である R 氏も、自らの立ち上げた福祉施設においては、職員の中にも賛成の人がいるから、決して反対だとは言わなかったと、賛成派への配慮について語る。K 氏も、個人の気持ちとしてはダムに反対だが、顧客に配慮し、従業員の生活を守る意識から、政治的なことは言わないと

語る。「自民党の人は作りたいみたいですね」と、ダムを政治的側面についても言及された。

一連の語りから、それぞれの立場の絡まり合いが、発言に影響を及ぼしていると推測できる。賛成反対の立場の違いが感じられる場面においては、発言が抑制される傾向にある。ダムのもつ治水以外の経済的政治的要素が影響し、治水の手段として検討することが難しい状態である事が理由として考えられる。したがって住民たちの間でダムの是非について議論すると、K氏の言う、「けんかになっちゃう」という状況が発生すると推察される。今回の聞き取りにおいては、反対派の言葉にも、経済効果への葛藤や、賛成派への配慮が含まれていた。今回話を伺った反対派は、皆強い反対の思いをもちながらも、葛藤を覚える人や、沈黙を選ぶ人もいた。それは、ダムがもつ治水以外の要素が大きく、人間関係における配慮の必要性が認識されている事を意味すると考えられる。声をあげる反対派の内心が複雑なように、沈黙する人々の内心も複雑であると推察される。下流域の賛成の声によって沈黙した五木村の人々は、沈黙する反対派であると推測される。また、K氏も経営者としての側面においては、沈黙を選ぶ。沈黙する人々の内心にも賛成反対の絡まり合いがあり、様々な思いを秘めていることが推測できる。T氏が指摘した、反対派に対する圧力の影響などをかんがみると、今回話を聞けていない賛成派の内心もまた複雑であることが推測される。

## 6. おわりに

今回川辺川ダム建設反対派の人々にインタビューを行った結果、国や県、土木関係者といった「ダム賛成派」と地域の医師とその妻や経営者、川漁師といった「ダム反対派」の対立が明らかになった。その対立には、治水・利水という表面的に期待される機能に加え、経済的政治的要素が深く関わっている。ダムがもたらす経済効果と、自然への影響の間で、反対に思いつつも葛藤する住民や、議論で勝ってもそれで相手がダム反対派になるわけではないので、あまり語りたくないと言った住民、土建業で生活する人々への配慮を語る住

民などの存在が浮かび上がってきた。ダムへの反対への強固な思いと同時に、その奥に複雑な葛藤があることがわかった。また、反対派において、行政との対話の断絶感からくる不信感が大きく、川とのつながりが保たれる治水対策へのニーズがあることがわかり、ダムと川、人間の関係と人間同士の関係性の複雑性を明らかにすることができた。

ダムだけではなく、現代の大規模開発問題は弊害や効果の両立が難しい「開発問題」が多発し、先鋭化している（帯谷 2002）。今回は取り上げきれなかったが、公害問題、原発問題、先住民問題や同和問題において、主に公的機関の対応において、今回の聞き取りと驚くほど類似する記述が見受けられる。人と人との共生、および人と自然の共生の実現には、いまだ大きな課題が残されている。

## 謝辞

本論文を執筆するにあたり、大変多くの方にお世話になりました。お話を聞かせてくださった熊本県人吉市および相良村の皆様に、深くお礼を申し上げます。本研究ノートのためにご協力いただいた皆様の貴重なお時間を頂きましたこと、心より感謝申し上げます。

## 注

- 1 未来共生プログラムは「社会問題」「課題に応える」「実践家・研究者」の育成を目指す大学院博士課程の学生を対象にしたプログラムである（[https://respect.hus.osaka-u.ac.jp/recruitment/files/2022/poster\\_gakushu\\_respect2022.pdf](https://respect.hus.osaka-u.ac.jp/recruitment/files/2022/poster_gakushu_respect2022.pdf)）。同プログラムではこれまで、西淀川公害訴訟の訪問や学習、有志による福島訪問研修、東北訪問研修、北海道訪問研修など、自然とひとが被害を被ってきた社会問題の内包されたフィールドワークも行われてきた。本研修はよりひとと自然の共生と実践に焦点をあてた研修となった。研修中に行った調査の内容を、有志学生（筆者らの内の岩本、楊、大川）によりまとめた成果の一つが本研究ノートである。本稿のほか、有志学生による活動報告も提出されている（未来共生プログラム HP 掲載「『熊本スタディツアー 2022』(7月16日～18日)のご報告」参照：<https://respect.hus.osaka-u.ac.jp/static/contents/classes/20221020kumamoto.html>（2022年10月31日閲覧））。
- 2 後述の語りに登場する霞堤の原型とされる。
- 3 潮谷義子前知事。その後、蒲島郁夫現知事が就任して川辺川ダム白紙撤回するも2020年の

熊本豪雨を受けて方針を転換し、ダム計画は復活する運びとなった。

- 4 S氏R氏夫妻が立ち上げ、運営していた福祉施設(特別養護老人ホームなど)でのケース。

## 参考文献

### 日本語文献

阿部健一

- 2022 「ヴァナキュラー・グローバリゼーション」 稲村哲也・山極壽一・清水展・阿部健一  
編『レジリエンス人類史』京都：京都大学学術出版会。

浦間碩

- 2022 「河川政策における知事意見表明としての責任について：球磨川治水事例研究を通じて」『熊本大学社会文化研究』20:57-74。

白井信夫, 田崎智宏, 田中充

- 2013 『地域の持続可能な発展に関する指標の設計、および地域の持続可能性と幸福度の関係の分析』『土木学会論文集G(環境)』69(6): 59-70。

帯谷博明

- 2002 「ダム建設計画をめぐる対立の構図とその変容」『社会学評論』53(2), 52-68。

「7.4 球磨川豪雨災害はなぜ起こったのか」編集委員会

- 2021 『7.4 球磨川豪雨災害はなぜ起こったのか：ダムにこだわる国・県の無作為が住民の命を奪った』東京：花伝社。

中野佳裕

- 2017 『カタツムリの知恵と脱成長一貧しさと豊かさについての変奏曲』東京：コモンズ。

松浦茂樹

- 1996 「アメリカ TVA のダム事業における歴史と現状」『水利科学』40(5):52-82。

村上公久

- 2012 「ダム撤去による河川生態系回復の試み：エルワ川ダム撤去到至る経緯」『聖学院大学論叢』24(2):17-39。

- 2015 「ダム撤去による河川環境回復の諸事例：アメリカ合衆国におけるダム撤去および撤去検討事例」『聖学院大学論叢』27(2):127-142。

和田一範, 竹内邦良, 有田茂, 後藤知子

- 2005 「歴史的な河川施設にみる水管理の教訓に関する考察—信玄堤と都江堰ならびに川除文書における流水制御を例として—」『土木学会論文集』789: 105-123。

若井郁次郎

- 2014 「消えゆく球磨川・荒瀬ダム 川の流れ再生の予兆。」『水資源・環境研究』27(2): 51-

56。

ラトウーシュ, S

2020 『脱成長』中野佳裕訳、東京：白水社。

### 英語文献

Stanley, Emily H., Martin W. Doyle

2003 Trading off: the ecological effects of dam removal. *Frontiers in Ecology and the Environment* 1.1: 15-22.

World Commission on Environment and Development

1987 *Our Common Future*. Oxford University Press.

### Web サイト

気象庁

2020 「令和2年7月豪雨」

[https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/2020/20200811/jyun\\_sokuji20200703-0731.pdf](https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/2020/20200811/jyun_sokuji20200703-0731.pdf) (2022/10/31 アクセス)

熊本県

2020 「市房ダムの概要」

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/106/2587.html> (2022/10/29 アクセス)

国土交通省

2022 「川辺川ダム砂防事務所」

<http://www.qsr.mlit.go.jp/kawabe/> (2022/10/31 アクセス)

相良村

2015 「相良村人口ビジョン」

<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/22797.pdf> (2022/10/24 アクセス)

2022 「相良村の人口」

<https://www.vill.sagara.lg.jp/q/aview/73/592.html> (2022/10/24 アクセス)

総務省統計局統計情報利用推進課

2022 「社会・人口統計体系 / 統計でみる市区町村のすがた2022 / 基礎データ」

[https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200502&tstat=000001166301&cycle=0&tclass1=000001166302&stat\\_infid=000032206863&result\\_page=1&tclass2val=0](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200502&tstat=000001166301&cycle=0&tclass1=000001166302&stat_infid=000032206863&result_page=1&tclass2val=0) (2022/10/31 アクセス)

内閣府

2021 「令和2年7月豪雨による被害状況等について(令和3年1月7日 14:00 現在)」

[https://www.bousai.go.jp/updates/r2\\_07ooame/pdf/r20703\\_ooame\\_40.pdf](https://www.bousai.go.jp/updates/r2_07ooame/pdf/r20703_ooame_40.pdf) (2022/10/31 アクセス)



農林水産省熊本県相良村

- 2022 「市町村の姿 グラフと統計でみる農林水産業 基本データ 熊本県相良村」  
<http://www.machimura.maff.go.jp/machi/contents/43/510/index.html> (2022/10/31 アクセス)

人吉市

- 2021 「令和2年度人吉市の人口」  
<https://www.city.hitoyoshi.lg.jp/q/aview/51/15387.html> (2022/10/24 アクセス)

防災科学技術研究所 調査速報

- 2020 「令和2年7月豪雨による熊本県人吉市および球磨村渡地区の洪水被害の特徴」  
[https://www.bosai.go.jp/info/saigai/2020/20200714\\_01.html](https://www.bosai.go.jp/info/saigai/2020/20200714_01.html)(2022/10/24 アクセス)

読売新聞オンライン

- 2020 「川辺川ダム計画はなぜ消えて、なぜ復活したかく上」  
<https://www.yomiuri.co.jp/choken/kijironko/cksocialsports/20201214-OYT8T50042/>  
(2022/10/29 アクセス)

---

# The Idea of "Reforming Nature" and Symbiosis/Kyosei between Nature and Human : Focusing on the Opinions of the Opponents of the Dam Construction in Sagara Village, Kumamoto Prefecture

Mayuko IWAMOTO, Lingyan YANG, Rennan OKAWA, Miwa SASAKI, Yiqiong WANG

## Abstract

The purpose of this paper is to examine the kyosei (symbiosis/ between humans and nature), and the related kyosei (coexistence) between humans, by using the example of the anti-dam opposition movement in the Kumagawa River in Sagara Village and Hitoyoshi City, Kumamoto Prefecture.

Specifically, this paper asked residents who were anti dam construction through interview. We managed to discover the dam's existence, which is a symbol of modern industry's theory of nature that "remodel nature to suit human needs and eliminates the threat of nature", have what kind of meaning among the opposing residents. As a result, in the interviews conducted this time, there were no opponents who did not approve of any merit of the construction of the dam, and it also found that the opponents had complicated conflicts emotion towards the dam.

Residents are strongly concerned that the dam construction will weaken the connection with the river, and they are distrustful of the administration that does not respond to the residents' request to reconsider the dam plan.

The purpose is to clarify what elements of dams are intertwined and what kind of conflicts appear, the complexity of dam problems, the reasons for opposition to anti-dam construction, and the causes of conflict with the government.

It was found that many anti-dam residents, did not express their true opinions towards the dam while they considered their relationship with pro-dam residences. We were able to confirm that there are complex conflicts deep down inside, and that the relationships between dams, rivers, humans, as well as relationship between humans are diverse and complex when they talked about dams.

**Keywords :** 2020 Kyushu floods, kumagawa river (Kumamoto), development issues, flood control, anti-dam movement, symbiosis (kyosei) between nature and human

---